



ダン・エッティンガー 指揮
東京フィルハーモニー交響楽団
ベートーヴェン：

第九

特別演奏会

Beethoven :
Symphony No.9 in D minor, Op.125
Conductor : Dan Ettinger
Tokyo Philharmonic Orchestra

2010.12.25 土

午後4時開演

盛岡市民文化ホール 大ホール

Saturday, December 25, 2010 at 4:00p.m. Morioka Civic Cultural Hall (Main Hall)

主催／(財)盛岡市文化振興事業団
共催／盛岡市、盛岡市教育委員会、岩手日報社
後援／テレビ岩手、エフエム岩手

ベートーヴェン:交響曲 第9番 ニ短調 作品125「合唱付」

日本では親しみを込めて「第九(だいく)」とも呼ばれるこの交響曲第9番ニ短調作品125は、ドイツ古典派音楽の頂点に位置する作曲家として知られるL.v.ベートーヴェン(1770-1827)の9番目にして最後の交響曲です。また、この曲には「シラーの頌歌『歓喜に寄せる』による終結合唱をとまなう」云々と記されているため、しばしば「合唱付」という副題が付けられます。

ベートーヴェンは、1813年に初演された交響曲第7番と第8番、そしてなによりも『ウェリントンの勝利』で通俗的な広い人気を獲得していました。翌1814年にフランス革命とナポレオン戦争終結後のヨーロッパの秩序再建と領土分割を目的として開催されたウィーン会議では、オープニングで『フィデリオ』が上演され、ベートーヴェンには高い栄誉が与えられましたが、この頃のベートーヴェンは、耳の病の悪化、肉体の衰え、弟たちとの不和、甥カールの事件、有力パトロンたちのウィーンからの退去など、私生活では最悪とも言える状況に陥っていました。しかし、1818年に入ると、作品106の『ハンマークラヴィア』ソナタから始まる晩年のピアノ・ソナタの最後のサイクルに取り組むことになり、また、パトロンのルドルフ大公がオルミッツの大司教に就任することが決まり、その就任式のために、特別な名作として名高い『ミサ・ソレムニス』の作曲を開始しました。この『ミサ・ソレムニス』とほぼ平行して書き進められたのが、交響曲第9番です。

これは、ロンドンのフィルハーモニー協会から交響曲の作曲依頼があったもので、当初は2種類の交響曲のプランがあったと言われています。一曲はニ短調の純器楽の交響曲、もう一つは声楽を加えるという斬新なアイデアに基づく作品でした。それはベートーヴェンの中では「ドイツ交響曲」と命名されており、シラー(1759-1805)の「歓喜に寄せる」に基づいたドイツの民族意識を高揚させるような作品として計画されていました。ところが、理由は不明ですが、ベートーヴェンはまったく異なる構想のもとにスケッチを進めていた二つの作品を、突然一つの作品にドッキングさせるという計画に変え、現在の交響曲第9番が誕生しました。

この交響曲は、1時間を超えるという、当時としては常識を超えた演奏時間や、通常第2楽章に置かれている緩徐楽章を第3楽章に置いたり、コントラファゴットの使用や打楽器の活躍など、ベートーヴェンはこの曲で大胆な変革を試みています。しかし、やはり最大の特徴はフィナーレに当時の交響曲としては異例な声楽を導入したことでしょう。この第4楽章は、前記のようにシラーの頌歌を歌詞にしていますが、ベートーヴェンは、このシラーの頌歌全体に音楽をつけたのではなく、音楽に合う自分の気に入った部分を選び出して用いました。このシラーの作品は、フランス革命直前の1785年にドレスデンで書かれたもので、当時26歳の青年詩人は、ドイツの封建的な政治形態と専制主義的な君主制に苦悶してきたこともあり、ここで人類愛と何百万の人たちの団結を理想として高らかに歌い上げました。ちなみに、シラーは当初これに「自由に寄せる」という題を付けようとしたのですが、当時の官憲の厳しさから、「自由」を「歓喜」に改めた、という話が伝わっています。その後フランス革命、ナポレオンの出現という歴史的事件を経て、ベートーヴェンも古い専制君主制を破壊し、新しい世界を作り出すかに見えたナポレオンに好意を示したりもしました。こうした性格のベートーヴェンがシラーの頌歌を気に入ったのは当然のことだったかも知れません。

1824年に完成されたこの作品は、同年5月7日にウィーンのケルトナートーア劇場で初演されており、曲が終わったとき、大喝采の中、耳のまったく聞こえないベートーヴェンは舞台上で聴衆に背を向けてスコアに見入っていたので、アルトの独唱者(ソプラノという説も)が彼の肩を押さえ、聴衆の方に向きを変えさせたという有名なエピソードが残されています。

第1楽章:アレグロ・マ・ノン・トロppo・エ・ウン・ポーコ・マエストーソ

大規模で壮大なソナタ形式による楽章で、冒頭、ホルンと弦楽器のトレモロによって奏される二音とイ音による完全五度は、宇宙的とさえいえるそのスケールの大きい広がりを見せます。次第に輪郭が見え出現した巨大な第1主題に続き、旋律的な第2主題は、最終楽章の「歓喜」の主題を暗示させます。

第2楽章:モルト・ヴィヴァーチェ

大規模なスケルツォで、その歯切れのよいリズムの躍動が圧倒的な推進力を生み、エネルギーに満ちた精神の高揚をもたらす、あたかもティンパニ協奏曲のような楽章。中間部でニ長調に移り、「歓喜」の時がさらに迫っていることを予感させます。

第3楽章:アダージョ・モルト・エ・カンタービレ

2つの主題による二重変奏で、美しく瞑想的な2つの主題は、変奏されるたびに天上世界が近づいてくるかのようです。この楽章は、晩年のベートーヴェンが書いた最も美しい音楽の一つと言われています。

第4楽章:プレスト・アレグロ・アッサイ

自由な変奏曲形式とみられるフィナーレ。前3つの楽章の主題が断片的に回想され、チェロとコントラバスが言葉のないレチタティーヴォで、各々の主題を「このような音ではない」と否定して、歓喜主題発見のプロセスを示します。やがて2度目のファンファーレからいよいよ「歓喜の頌歌」が始まります。独唱と合唱を交えた歓喜の歌が輝かしく歌われながら次第に感情の高まりを示し、まさに感動的といえるクライマックスが築きあげられ、オーケストラのトゥッティによる力強く壮大な結末を迎えます。

〈指揮〉ダン・エッティンガー

〈管弦楽〉東京フィルハーモニー交響楽団

〈独唱〉森 麻季 (ソプラノ)
谷 口 睦 美 (メゾ・ソプラノ)
シー・イー・ジェ (テノール)
堀 内 康 雄 (バリトン)

〈合唱〉

Soprano

【盛岡パッハ・カンタータ・フェライン】

青伊	瀧	憲	子	赤	塚	温	子	安	部	花	澄	石	澤	信	子
伊菊	藤	明	愛	大	石	敦	子	大	矢	克	子	岡	野	美	映
昆	地	日	香	菊	池	澄	子	菊	池	節	子	熊	谷	充	子
佐	藤	千	晶	近	藤	順	子	昆	野	志	穂	本	藤	純	子
千	田	真	子	高	橋	沙	綾	西	島	知	子		口	真	澄
		絵	未	奈	良	めぐみ				る	み		良	い	子

【岩手大学合唱団】

阿久	巴	佐	惠	金	佳	枝	磯	沼	佳	世
熊谷	沙也加	々木	利子	細	和佳	子	三	上	華	奈
梅木	美里	角	友喜	高	彩	美	山	崎	玲	子
江藤	友里	菊	紗史	鈴	木	花	高	橋	み	ず
塩野	綾子	工	詩織							

【岩手大学教育学部附属中学校】

相澤	利奈	岩	紀	乃	工	藤	由	稀	田	口	美	希
館澤	美咲	田	真	歩	長	岡	幸	希	中	敷	安	希
山田	あゆみ	三	早	紀	舞	良		瞳	柳	澤	彩	紀

【岩手大学教育学部附属小学校】

大澤	奈生	菊	池	慧	人	黒	澤	穂	木	坂	瑞	那
山中	史也	関	根	和	子	高	橋	土	伊	東	萌	華
	美咲	谷	藤	雅	捺	野	本	優	島	田	七	虹

Tenor

【盛岡パッハ・カンタータ・フェライン】

阿	部	守	雄	伊	藤	勝	元	太	田	頼	則	小	川	隆	弘
柿	崎	倫	史	加	藤	照	道	北	岡	倫	典	佐	木	幹	雄
高	橋	孝	男	新	山	隆	健	西	野	真	史	々	木	啓	一
日	黒	賢	哉	吉	村		哲					正			

【岩手大学合唱団】

勝	部	健	作	沼	田	臣	矢	志	賀	主	吾	高	橋	秀	明
二	橋	卓	晋	伊	藤	陽	平	近	藤	直	己	齋	藤	健	晴
田	中	翔	也	赤	萩	周	悟	中	野	奏	保	末	川	佑	也
吉	川	内	太	猪	越		淳	佐	藤	和	敬		田	將	嚴
水			勇												

【岩手大学教育学部附属中学校】

熊	谷	駿	佑	熊	谷	慎	太郎	佐	々	木	振	一	朗
---	---	---	---	---	---	---	----	---	---	---	---	---	---

〈合唱指揮〉佐々木 正 利

〈合唱アシスタント〉星 和 子
正 木 啓 一



Alto

【盛岡パッハ・カンタータ・フェライン】

一	守	奈	那	伊	藤	結	香	大	場	啓	子	小	川	暁	美
小	寺	洋	智	柿	崎	千	泉	金	子	千	鶴	桐	原	絹	子
野	々	美	子	佐	藤	紗	公	佐	藤	恵	恵	鈴	木	英	美
々	木	有	希	田	口	都	都	武	田	子	子	丹	野	ま	り
李	沢	麻	子	原	戸	波	穂	平	井	真	子	廣	澤	真	子
外	崎	香	苗	水	田	穂	由	三	宅	佐	奈	茂	木	容	子
三	浦	英	子	吉		智		米	内	里		若	生	道	子
吉	岡	し	を												
渡	辺														

【岩手大学合唱団】

新	宮	央	子	牧	野	起	奈	岩	本	奈	月	田	中	結	香
徳	田	千	牙	伊	藤	咲	良	岩	本	絵	里	加	藤	美	希
々	々	志	夏	白	井	優	子	小	小	夏	実	小	坂	文	代
千	田		保	奈	良		梢		葉	彩	乃				

【岩手大学教育学部附属中学校】

秋	元	悠	里	浅	沼	ひ	奈	伊	藤	日	子	小	島	沙	英
富	塚		梓	中	田	ま	子	丸	山	奈	音	田	海	熙	尚
						莉				風		熱			

【岩手大学教育学部附属小学校】

千	葉	修	太	千	花	生	石	川	友	理	山	口	ひ	より
白	澤	万	智	太	春	花	菊	地	彩	利	金	田	樹	奈
坂	本	萌	花	水	菜	莉	阿	部	紗	綾	泉	山		萌
佐	藤	里	香	石	菜	花	山	口	しい	な				

Bass

【盛岡パッハ・カンタータ・フェライン】

赤	塚	貴	史	阿	部	学	及	川	洪	小	原	一	徳
菊	池	安	雄	兒	玉	良	佐	木	一	佐	藤	和	久
佐	藤	芳	郎	鈴	木	裕	高	橋	聰	田	沢	丈	隆
千	田	敬	之	長	沢	士	名	取	健	成	田		二
芳	賀	郁	夫	廣	昭	典	山	岸	健	横	山		泉
渡	辺	信											

【岩手大学合唱団】

葛	野	巨	遠	藤	直	哉	會	川	翔
小	々	人	鈴	木	耕	太	目	黒	幸
阿	木	次	小	野	雄	郎	西	屋	健
津	野	樹	野	寺	脩	紀			
野	菅	悠	々	木		平			

【岩手大学教育学部附属中学校】

今	井	慧	大	塚	観	喜	佐	藤	馨	達	増	建
土	村	斗	藤	井	亮	太	八	重	英	山	田	真
田	鎖	要	播	磨	天	人			一郎			

※携帯電話、アラーム時計等をお持ちの方は、電源を必ずOFFにしてください。
※お持ちのチケットに記載された座席以外ではお聴きになれません。
※会場内での写真撮影、録音・録画等は固くお断りいたします。



ダン・エッティンガー (指揮) *Dan Ettinger, Conductor*

イスラエル交響楽団音楽監督、マンハイム国民劇場音楽監督。2003年から08年までベルリン国立歌劇場カペルマイスター兼音楽監督(ダニエル・バレンボイム)助手を務め、ウィーン国立歌劇場、ロスアンジェルス・オペラ、バイエルン国立歌劇場、ワシントン・ナショナル・オペラなど世界の主要歌劇場に出演。09-10年シーズンのメトロポリタン歌劇場オープニングを指揮し、10年には英国ロイヤル・オペラ、11年にはパリ・オペラ座を指揮予定。新国立劇場には04年『ファルスタッフ』以来毎シーズン登場し、06年新制作『イドメネオ』をはじめ、『ニーベルングの指環』全曲(09年『ラインの黄金』『ワルキューレ』、10年『ジークフリート』『神々の黄昏』)の指揮で大好評を博した。東京フィルには05年4月定期公演以来毎シーズン登場し、創造性あふれる指揮で大きな反響を呼んでいる。2010年4月より東京フィルハーモニー交響楽団常任指揮者。



森 麻季 (ソプラノ) *Maki Mori, Soprano*

東京藝術大学及び大学院独唱専攻修了。ミュンヘン国立音楽大学大学院へ留学中、ブラジド・ドミンゴ世界オペラコンクールを始め、数多くの国際コンクールにおいて上位入賞を果たす。ワシントン・ナショナル・オペラ『後宮からの逃走』でアメリカデビュー以来、ワシントンとロスアンジェルス・オペラでドミンゴ、オプラスツォフ、フォン・シュターデ、アラニーヤ、ケント・ナガノ、ブレンデル等と共演し成功をおさめる。小澤征爾、チョン・ミンフン、アシュケナージをはじめとする著名指揮者や海外のオーケストラとの共演も数多く、『第九』や『レクイエム』等のソリストとして国内主要オーケストラに度々招かれている。3大テノール・コンサートでは、カレーラス、バヴァロッティと共演し話題となる。古典から現代まで幅広いレパートリーを誇り、コロラトゥーラの類稀なる技術と透明感のある美声、深い音楽性と華のある容姿は各方面から絶賛され、まさしく日本を代表する国際的なオペラ歌手としてTV、新聞などのメディアでも常に注目を集めている。今年(2010年)は、トリノ王立歌劇場『ラ・ボエーム』(ムゼッタ役)に出演。CDはエイベックス・クラシックスより、『麗しき瞳よ』など5枚リリースしている。ワシントン・アワード、出光音楽賞、ホテルオークラ賞、安宅賞受賞。二期会会員。



谷口 睦美 (メゾ・ソプラノ) *Mutsumi Taniguchi, Mezzo Soprano*

東京藝術大学卒業。同大学院独唱科、二期会オペラスタジオ修了。06年二期会オペラデビューとなった『皇帝ティートの慈悲』セスト役で大成功を収め、世界的に有名な演出家であるベーター・コンヴィチエニから賛辞を贈られるなど数多く賞賛の声が寄せられた。07年12月の新国立劇場『はじめてのオペラ』『カルメン』では主役に抜擢された。08年6月には二期会『ナクソス島のアリアドネ』作曲家役で、清新な演技と歌唱で魅了した。豊かな歌声とスケール感のある表現力、舞台映える容姿で国内外からの期待が集まっている。二期会会員。



シー・イー・ジェ (テノール) *Shi Yijie, Tenor*

1982年上海生まれ。2006年日本の東邦音楽大学を首席で卒業。同大学院特別研修生として選ばれオーストリアに留学。フェルツィョ・タリアヴィーニ国際声楽コンクール、トティ・ダール・モンテ国際声楽コンクール他数々の国際声楽コンクールで優勝。山崎明美、ベーター・シュメルツァー、リチャード・バーカーに師事。08年アカデミア・ロッシーニアーナ『ランスへの旅』で騎士ベルフィオル役で出演。09年ロッシーニ・オペラ・フェスティバル本公演『オーリー伯爵』のタイトルロールに大抜擢され喝采を得て、国際的な活躍を始める。今後は、フェリーチェ歌劇場『愛の妙薬』、ロッシーニ・オペラ・フェスティバル『デメトリオとポリビオ』、フィレンツェ五月音楽祭歌劇場『ランスへの旅』、サン・カルロ歌劇場『フィレンツェの麦わら帽子』等に出演予定。最近では、ローマ・サン・チェチリア国立アカデミー管弦楽団『ランスへの旅』、ローザンヌ歌劇場でのロッシーニ『オテロ』、サン・カルロ歌劇場『後宮からの誘拐』等への出演が挙げられる。



堀内 康雄 (バリトン) *Yasuo Horiuchi, Baritone*

慶応義塾大学法学部卒。第21回イタリア声楽コンクール第1位、第39回トゥールーズ国際声楽コンクールで優勝し、94年ヴェネツィア・フェニーチェ劇場の『ラ・ボエーム』でデビュー。以後イタリアを中心に著名歌劇場で活躍。日本では藤原歌劇団、新国立劇場、びわ湖ホール等で『椿姫』『マクベス』『リゴレット』『アイダ』『仮面舞踏会』『ドン・カルロ』『ルチア』『ラ・ジョコンダ』『アッティラ』『シチリアの夕べの祈り』等のオペラや各種コンサートで活躍。艶やかな美声と集中力のある演技で、高い評価を得ている日本を代表するバリトン歌手。藤原歌劇団団員。ミラノ在住。

東京フィルハーモニー交響楽団 *Tokyo Philharmonic Orchestra*

1911年創立。2001年に新星日本交響楽団と合併し、日本で初めてシンフォニーオーケストラと劇場オーケストラの両機能を併せ持つオーケストラとなる。2010年4月、ベルリン国立歌劇場やメトロポリタン歌劇場をはじめとする世界の楽壇で活躍するダン・エッティンガーを常任指揮者に迎えた。自主公演の他、新国立劇場などでのオペラ・バレエ演奏、NHK他の放送演奏など、高水準の演奏活動を展開。海外公演も積極的に行い、特に2005年11月のチョン・ミンフン指揮による『日中韓未来へのフレンジップツアー』では、中国、韓国で7公演を実施し、各地で絶賛を博し『世界のファーストクラス・オーケストラ』を強く印象づけた。オーチャードホールとフランチャイズ契約を結び、文京区、千葉市、和光市、軽井沢町と事業提携している。公式ウェブサイト <http://www.tpo.or.jp>

